

女子大学生における人間関係の枠組みと親準備性

井森 澄江¹⁾ 伏見 友里²⁾

Personal Framework of Social Relationships, Friendship, and Readiness for Parenthood among Contemporary Students from a Women's University

Sumie IMORI Yuri FUSHIMI

要旨

本研究の目的は、女子大学生のもつ「人間関係の枠組み」を探ること、またその枠組と対人関係の取り方（友人関係）および親準備性（養護性）の関連を明らかにすることである。対象は151名の女子大学生。フェイスシート、ARS（Affective Relation Scale）、友人関係尺度、養護性尺度などからなる質問紙を実施した。その結果、ARSの分析から大多数の女子大学生が、友達あるいは母親あるいは恋人を中核とした階層的構造をなす複数の重要な他者をもつこと。しかし、少数ではあるが、ARS得点が極端に低い、重要な他者をもたない（一匹狼型）者もいることが示された。一匹狼型は友人関係尺度の分析から他者との深い関わりを回避する傾向を持つことが示唆された。また、一匹狼型は養護性尺度の分析からそれ以外と比べて養護性得点が有意に低いことが示され、養護性を形成するための介入を必要とすることが示唆された。「人間関係の枠組み」の類型によって、友人関係の取り方や養護性を構成すると考えられる親に対する感情や親になることへの積極的志向等に違いが見られることも示唆された。

キーワード：人間関係の枠組み、親準備性、女子大学生

目的

本研究は、現代の女子大学生が大学生活の中で、若い成人期の発達課題「親密性」と成人期の発達課題である「世代性：generativity」の先行資質である親準備性や社会人基礎力をいかに身に着けていくかについて明らかにしようとするものである。これまで筆者らは親準備性、社会人基礎力として養護性、ソーシャルスキルをとり上げ、青年期の養護性尺度の構成を試みるとともに養護性の発達に関連する要因として幼児期から大学期（現在）の親を中心とした愛着関係のあり方を検討してきた（井森・岩治ら、2004¹⁾、2008²⁾、2010³⁾、2011⁴⁾等、岩治・井森2010⁵⁾、

2011⁶⁾等)。また、ソーシャルスキル尺度（相川ら、2005⁷⁾）を用いて大学4年間におけるソーシャルスキルの発達変化を示すとともに大学生活（大学での勉学充実度、実習経験等）がどのようにその発達に関連しているかを検討した。その結果、家族との対人関係充実度や大学外（アルバイト等）対人関係の充実度とは関連がなく、大学での勉学充実度・大学内での対人充実度がソーシャルスキルの発達に関係していること、また学外施設における実習経験もソーシャルスキルの発達に関連していることが示唆された。さらに、愛着の安定性がソーシャルスキルのベースになっていることも示唆された（井森・岩治、2012⁸⁾）。養護性については勉学に対する充実度、大学内・大学外の対人関係充実度、家族との対人関係充実度のすべてが養護性を高

1) 東京家政大学人文学部教育福祉学科心理学研究室

2) 東京家政大学人文学部教育福祉学科資料室

める要因であることが示唆された。また、現在及び過去の安定的な愛着関係がポジティブで安定した養護性形成に関連していること、さらに男子大学生においては現在の愛着（内的作業モデルIWM）が、女子大学生においては就学前の母子関係が養護性と関連が深いことが示唆された（岩治・井森, 2012⁹⁾）。これまでの一連の研究では大学生の親準備性・社会人基礎力の発達要因としては大学生活に関連した勉学と対人関係充実度、親（特に母親）との愛着関係を中心に検討し、その関連性は示されたとはいえるが、大学生が持つ実際の間人関係の枠組み（人間関係の豊かさ強さ）については触れてこなかった。現代の若者は競争原理を忌避する〈優しさ指向〉（栗原, 1981）、対人関係に適応過剰・不能を示す〈コミュニケーション不全症候群〉（中島, 1991）、他人と一線を引いて衝突を避ける〈マサツ回避の世代〉（千石, 1994）、お互いを傷つけないことに過敏な〈優しさの精神病理〉（大平, 1995）等々、相手と正面から対峙してコミュニケーションを行うことや対人関係を持つことを嫌う・恐れる・苦手とするようになってきたといわれる。ただし、これは対人関係の断絶を若者が指向しているのではない。逆に日本に限らず先進国の成熟した社会では人々の意識は物質的な豊かさより精神的な充足を求めて身近な人間関係へと向かい、若者ほど「友だちがいないようにみられるのは耐えられない」傾向が強くなっている。すなわち対人関係を求めている。対人関係そのもの（をとりもつこと）には積極的なのだが、その対人関係に「強く」あるいは「濃く」関わること・拘束されることには消極的になっているのだと考えられる（辻, 1996¹⁰⁾, 2009¹¹⁾）。では実際、現在の大学生はどのような、またどの程度の強さの対人関係すなわち「親密性」をもっているのか。今回の報告では、

まず若い成人期の発達課題であるこの「親密性」に焦点を当てる。この課題の達成が社会人になること、親になることのベースと考えられるからである。そして女子大学生における「親密性」を探るとともに、その「親密性」と成人期の発達課題「世代性」の先行資質としての親準備性・社会人基礎力との関連を探っていく。

本報告の具体的目的は以下のとおりである。

- ①現代の女子大学生の持つ親密性に迫るために「人間関係の枠組み」とその強度を探る。
- ②それに加えて女子大学生の持つ対人関係様式（友人関係の取り方）を明らかにする。
- ③「人間関係の枠組み」とその強さが対人関係様式（友人関係の取り方）とどのように関連しているのか検討する。
- ④そのうえで成人期の課題「世代性」の先行資質の一つである養護性と「人間関係の枠組み」とその強さはどのように関連しているのかを検討していく。

方 法

1. 対象者：首都圏A女子大学151名（1年生63名、2年生23名、3年生11名、4年生54名）年齢18～22歳（全員この研究の対象者になることに同意）
2. 実施時期：2014年5月～7月
3. 実施方法：オリエンテーション終了後、質問紙を配布し、その場での回答を依頼した。また、同時にNEO-FFI人格検査を実施した。
4. 質問紙の構成：フェイスシート、段階評定尺度項目、自由記述項目からなる。
 - (1) フェイスシート（学籍番号、年齢、家族構成、現在の居住形態等）
 - (2) 段階評定尺度項目：4段階評定尺度項目－養護性尺度46項目（岩治, 2005¹²⁾）、レジリエンス尺度22項目（伏見ら,

2012¹³⁾、時間的展望体験尺度18項目(白井, 1994¹⁴⁾、友人関係尺度17項目(岡田, 1995¹⁵⁾、5段階評定尺度項目 – ARS愛情の関係尺度12項目(Takahashi, 1990¹⁶⁾、2000¹⁷⁾)

本報告では1)ARS愛情の関係尺度、2)友人関係尺度、3)養護性尺度について取り上げる。

1) ARS愛情の関係尺度(Takahashi, 1990, 2000, 高橋, 2002¹⁸⁾):「人間関係の枠組み」とその強さの測定

Takahashi(2000)により愛情の関係(人間関係)の枠組みを測定するために開発された「愛情の関係尺度(Affective Relationships Scale: ARS)」を使用した。

愛情の関係とは人間関係の中の中核的で比較的安定した部分を指し、これは人間の生存や安寧にとって不可欠な情動的な関係である(高橋, 2002, 2007¹⁹⁾、2010²⁰⁾)。ARS愛情の関係尺度における愛情の関係とは「重要な他者と情動的な交渉をしたいという要求を充足させる人間関係」と定義されるもので、これには情動的支えを求める要求、情動や経験を共有したいという要求、他者を養護したいという要求という三種類の要求が含まれる。この愛情の関係モデルに基づく人間関係(愛情の関係)の枠組みは、こうあってほしい、こうしたいという関係についての主観的な表象であり、この表象に基づいて、ある状況の対人行動がなされると仮定できる。愛情の関係モデルにおける人間関係の枠組みは以下の3つの性質を持つ。

- i 個人は多様な心理的機能を割り振りながら、自分にとって重要だと選んだ複数の対象からなる枠組みを構築している(枠組みには複数の重要な対象が含まれる。また個人差がある)。
- ii この枠組は階層的な構造をなしている。す

なわち、各対象への心的機能の配分にはいざという事態での効率からいって偏りがあり、どの対象かが相対的に多くの機能を割り振られ中核的な対象となっている。

iii 枠組みは変容する可能性を持つ。

今回は女子大学生が調査対象であることから、愛情の要求を向ける対象を、母親、父親、最も親しいきょうだい、同性の最も親しい友達、恋人、尊敬する人、その他で重要な人の7対象とし、6種の愛情の関係の心理的機能を記述した12の質問項目(6機能×2項目)について、各対象に対する愛情の要求の強さの程度を5段階(5:そう思う~1:思わない)で評定してもらった。得点の範囲は各対象別に12~60になる。

具体的な6つの愛情の関係の心理的機能とその項目の例は以下の通り。なお○○には母親等、各対象名が入る。1. 近接を求める(できることならいつも○○と一緒にいたい)、2. 心の支えを求める(○○が私の支えであってほしい)、3. 行動や存在の保証を求める(自信がわくように○○に「そうだ」と言ってほしい)、4. 激励や援助を求める(何かをする時には○○が励ましてくれるとよい)、5. 情報や経験を共有する(○○とはお互いの喜びを分かち合いたい)、6. 養護する(○○が困っている時には助けてあげたい)

2) 友人関係尺度(岡田, 1995):対人関係様式(友人関係の取り方)の測定

岡田(1995)の青年期の友人関係様式の3種の特徴「深刻さを回避して楽しさを求め友人と一緒にいることを好む群れ指向」、「関係の深まりを避け他者からの評価を気にする対人退却」、「心を打ち明け気遣い一人の友人との関係を大切にす優しさ指向」に関連する22項目につい

での因子分析(大学生165名)から示された17項目3下位尺度からなる友人関係尺度を使用した。「気遣い(互いに傷つけないように気を使う等)6項目」、「ふれあい回避(お互いのプライバシーには入らない等)6項目」、「群れ(ウケるようなことをよくする等)5項目」の17項目について、「1. 全く当てはまらない」から「4. 非常に当てはまる」の4段階で評定してもらった。

3) 養護性尺度(岩治, 2005): 成人期の課題「世代性」の先行資質の一つである養護性の測定岩治(2005)の養護性に関する63項目についての因子分析(男子学生170名、女子学生161名、平均年齢20.97歳)によって示された46項目6下位尺度からなる養護性尺度を使用した。「子ども・赤ちゃんへの関心尺度(子どもが遊んでいるのを見るのはおもしろい等)17項目」、「親に対するポジティブな感情尺度(親が自分にしてくれたことをいろいろ思い出す等)10項目」、「親になることへの積極的志向尺度(自分は子どもを育て良い親になろうと思っている等)5項目」、「奉仕的な志向尺度(人の世話が好きである等)5項目」、「将来の子育てに関するネガティブな予測尺度(将来、子育てに悪戦苦闘している自分の姿を想像する等)4項目」、「動植物への関心尺度(雨に濡れた迷子の犬など

を見るとかわいそうに思う等)5項目」の46項目について、「1. 全くそう思わない」から「4. 非常にそう思う」の4段階で評定してもらった。

結果と考察

1. 人間関係の枠組み (ARSの分析)

(1) 対人関係の種類

1) 最高得点法による類型: Takahashi (1990, 2000) に基づき、母親、父親、最も親しいきょうだい、同性の最も親しい友達、恋人、尊敬する人、その他で重要な人の7対象それぞれのARS 6心理的機能得点の合計得点(得点範囲12~60)を求めた。4対象以上に回答した人が151名中146名96.7%であった。高橋では最高合計得点の対象を個人の中核的な人ということで対人関係の種類を決定。ただし合計点が36点以下をARS得点が極端に低い、他者にほとんど関心を示さないということで一匹狼型とする。高橋の研究によると一匹狼型は適応困難傾向が示されている。この方法(最高得点法)での今回の被調査者151名の類型とその人数を学年ごとに表1に示した。また、比較のために井上・高橋(1999²¹⁾)における各類型の占める割合を表1に併記した。

表1 最高得点法によるARS 類型とその人数

類 型	1年	2年	3年	4年	合計(%)	井上・高橋(%)
母親型	10	3	2	12	27 (17.9)	(8.5)
父親型	0	0	0	0	0 -	(0.6)
きょうだい	3	3	0	1	7 (4.6)	-
祖母	0	0	0	1	1 (0.7)	-
友達型	20	6	4	18	48 (31.8)	(26.0)
恋人型	7	4	2	9	22 (14.6)	(40.2)
一匹狼型	4 多対象型1含	0	1	1	6 (4.0)	(2.5)
多対象型	19	7	2	12	40 (26.5)	(15.3)
計	63	23	11	54	151 (100)	(93.1)

井上・高橋(1999)の女子大学生のデータに比べて今回のデータでは恋人型が少なく、友達型、母親型が多くなっている。今回のデータは高橋に比べ家族との同居者が多く、一人暮らしか家族と同居かという居住形態がこれに関係しているのかもしれない。また、今回のデータでは多対象型も多くなっている。学年間有意差は見られないが数値としては1年で多対象型が多かった。一匹狼型は全体としては4%であったが、これも数値としては1年で多かった。

2) 多対象型再分類法による対人関係の類型：高橋(2007)によると日本の中学生から高齢者までのARSの分析から、類型の出現の比率は年代により異なる。しかし、各年齢群の80%前後が、家族を中核とする型(母親型、父親型など)か非家族を中核とする型(友人型、恋人型など)に分類することができる。残りは、どの対象に対しても得点が高く誰が中核になっている

かわからない多対象型と、誰に対しても得点が低い一匹狼型であり、一匹狼型はどの年齢群でも3~10%程度出現していることが示されている。今回のデータでは一匹狼の出現率はこれまでの研究結果と違いはみられないが、多対象型の出現率は高い。そこで、多対象型を母親・父親・きょうだい・祖父母という家族で構成されるタイプ〈家族型〉、友達、恋人、尊敬する人等非家族で構成されるタイプ〈非家族型〉及び家族と非家族で構成される混合タイプ〈混合型〉に分類し、最高得点法による母親型、きょうだい型等家族を中核とする型を〈家族型〉に、友達型、恋人型等非家族を中核にする型を〈非家族型〉に加え、対人関係の型を家族型・非家族型・混合型と一匹狼型に分類することにより対人関係の特徴を探ることとする。この方法(多対象型再分類法)での今回の被調査者の対人関係の類型とその人数と割合を学年ごとに表2に示した。

表2 多対象型再分類法によるARS類型とその人数

類 型	1年	2年	3年	4年	合 計
家族型	17名	7名	2名	18名	44名 29.1%
単独	13	6	2	14	35 (23.2)
2人		1		3	4 (2.6)
3人	3			1	4 (2.6)
4人以上	1				1 (0.7)
非家族型	33名	12名	7名	32名	84名 55.6%
単独	27	10	6	27	70 (46.4)
2人	5	2	1	5	13 (8.6)
3人	1				1 (0.7)
4人以上					
混合型	9名	4名	1名	3名	17名 11.3%
単独	4	4			8 (5.3)
2人	2			2	4 (2.6)
3人	3		1	1	5 (3.3)
一匹狼型	4名		1名	1名	6名 4.0%
合 計	63名	23名	11名	54名	151名 100%

多対象型再分類法による類型においても、井上・高橋（1999）のデータに比べ、家族型が多く、非家族型が少ない傾向がみられた。また混合型については母親・友達が一番多く5名であった。また4人以上対象者をあげその全てが60点というものもみられた。

(2) 対人関係様式

友人関係尺度の3下位尺度（気遣い6項目、ふれあい回避6項目、群れ5項目）について各平均得点と（SD）を岡田のデータと対比させ表3-1に示した。

表3-1に示すように、数値的には岡田（1995）の大学生（男女）データに比べ、ふれあい回避得点は低く、群れ得点はやや高い傾向が見られた。性差が影響している可能性が考えられる。

(3) 対人関係の類型と対人関係様式

1) 多対象型再分類法による対人関係の類型と関係様式：多対象型再分類法による対人関係の類型別に友人関係尺度の3下位尺度（気遣い6項目、ふれあい回避6項目、群れ5項目）各平均得点とSDを算出し、表3-2に示した。

今回のデータでは、気遣い ($F(3,147) = 3.469 p < .05$)、ふれあい回避 ($F(3,147) = 3.115 p < .05$)、群れ ($F(3,147) = 5.089 p < .01$) 全ての下位尺度で多対象型再分類法による類型間で有意差がみられた。気遣いは、混合型と非家族型で得点が高く、一匹狼型が低い。一匹狼型は混合型、非家族型の比べ気遣い得点が有意に低かった。ふれあい回避は、逆に非家族型と混合型で低く、一匹狼型は高い。群れは、数値的には混合型が最も高く、次いで家族型、非家族型と続き、一匹狼型が低い。一匹狼型は混合型に比べ群れ得点が有意に低い。と同時に混合型は非家族型に比べると群れ得点は有意に高い。

表3-1 対人関係様式：友人関係尺度の3下位尺度の各平均得点

	今回のデータ n=151		岡田1995 n=165	
	尺度得点	SD	尺度得点	SD
気遣い(6項目)	17.15	2.56	17.12	2.56
ふれあい回避(6項目)	15.07	2.68	18.28	3.16
群れ(5項目)	14.81	2.49	13.69	2.65

表3-2 多対象型再分類法による類型と関係様式：多対象型再分類法による類型別友人関係下位尺度平均得点

	家族型 (n=44)		非家族型 (n=84)		混合型 (n=17)		一匹狼型 (n=6)	
	尺度得点	SD	尺度得点	SD	尺度得点	SD	尺度得点	SD
気遣い(6項目)	16.66	2.63	17.43	2.41	17.94	2.28	14.67	3.20
ふれあい回避(6項目)	15.75	2.72	14.68	2.68	14.53	2.15	17.17	2.40
群れ(5項目)	15.02	2.23	14.54	2.51	16.47	2.45	12.50	1.05

一匹狼は群れず、気遣いをせず、ふれあい回避の傾向があるといえる。混合型はそれとは全く逆でふれあいを回避する傾向はなく、気遣いをし、群れる。非家族型はふれあい回避の傾向はなく、気遣いをするが、群れないという特徴がみられた。

2) 最高得点法による対人関係の類型と関係様式：表3-3に最高得点法による類型（祖母型1名を除く）と友人関係尺度の得点の関係を示した。気遣い ($F(5,144) = 2.225, p < .10$) では類型間に有意傾向が、ふれあい回避 ($F(5,144) = 2.316, p < .05$)、群れ ($F(5,144) = 3.949, p < .01$) では類型間で有意差がみられた。

気遣いは、多対象型、友達型で得点が高く、一匹狼型が低い。ふれあい回避は、恋人型で得点が最も低く、一匹狼型が最も高い。群れは数値的には多対象型で最も高く、次いで母親型、きょうだい型と続き、一匹狼型が最も低い。一匹狼型は多対象型に比べ群れ得点が有意に低い。と同時に多対象型は友達型に比べて群れ得点は有意に高い。

多対象型は気遣い、群れる。友達型は気遣うが、群れる傾向はみられない。恋人型はふれあい回避傾向が最も少なく、群れる傾向はみられないという特徴が見られる。

3) 誰に対しても得点が低い一匹狼型、低ARS得点群の対人関係様式

高橋の研究によると誰に対しても得点が低い一匹狼型には適応困難傾向が示されている。一匹狼型はARS合計得点が36点以下とされている。被調査者151人中6名が一匹狼型に分類された。今回得点が低い傾向にあるものの特徴を探るためARS合計得点が48点未満を低ARS得点群とし、一匹狼型とそれ以外、および低ARS得点群とそれ以外の友人関係尺度下位尺度平均得点 (SD) の比較を行った (表4-1、4-2)。

一匹狼型 ($n=6$) とそれ以外の群 ($n=145$) と比較したところ (表4-1)、気遣い ($t(149) = -2.473, p < .05$) 群れ ($t(149) = -2.363, p < .05$) に有意差がみられ、一匹狼型はそれ以外に比べ、有意に気遣い得点、群れ得点が低かった。ふれあい回避 ($t(149) = 1.969, p < .10$) には有意傾向が見られ、一匹狼型はそれ以外に比べ、ふれあい回避が高い傾向が示された。

低ARS得点群 ($n=26$) とそれ以外 ($n=125$) を比較したところ (表4-2)、気遣い得点に有意差は示されなかったが、ふれあい回避 ($t(149) = 2.459, p < .05$) 群れ ($t(149) = -2.577, p < .05$) に有意差がみられ、低ARS得点群はそれ以外に比べふれあい回避得点が高く、群れ得点は低かった。

表3-3 最高得点法による類型と関係様式：最高得点法による類型（祖母型1名を除く）別友人関係下位尺度平均得点

	母親型 (n=27)		友達型 (n=48)		恋人型 (n=22)		きょうだい型 (n=7)		多対象型 (n=40)		一匹狼型 (n=6)	
	尺度得点	SD	尺度得点	SD	尺度得点	SD	尺度得点	SD	尺度得点	SD	尺度得点	SD
気遣い	16.63	2.99	17.58	1.92	16.73	2.86	16.86	2.67	17.70	2.44	14.67	3.20
ふれあい回避	15.93	2.32	14.94	2.71	13.86	2.40	15.43	3.26	15.00	2.76	17.17	2.40
群れ	14.93	2.18	14.27	2.38	14.27	2.81	14.86	2.41	16.03	2.37	12.50	1.05

表4-1 一匹狼型とそれ以外の友人関係尺度下位尺度平均得点 (SD) の比較

	一匹狼型 (n=6)		それ以外 (n=145)	
	尺度得点	SD	尺度得点	SD
気遣い	14.67	3.20	17.26	2.49
ふれあい回避	17.17	2.40	14.99	2.67
群れ	12.50	1.05	14.91	2.48

表4-2 低ARS得点群とそれ以外の友人関係尺度下位尺度平均得点 (SD) の比較

	低ARS得点群 (n=26)		それ以外 (n=125)	
	尺度得点	SD	尺度得点	SD
気遣い	16.38	2.98	17.31	2.44
ふれあい回避	16.23	2.27	14.83	2.71
群れ	13.69	2.46	15.05	2.44

2. 養護性と人間関係の枠組み

(1) 養護性

養護性尺度の6下位尺度(子ども・赤ちゃんへの関心17項目、親に対するポジティブな感情10項目、親になることへの積極的志向5項目、奉仕的な志向5項目、将来の子育てに対するネガティブな予測4項目、動植物への関心5項目)について各平均得点と(SD)を岩治ら(2011)のデータと対比させ表5-1に示した。なお、養護性得点についてはどちらも将来の子育てに対するネガティブな予測尺度項目を逆転させて合計し算出している。

女子大学2年生のデータである岩治ら(2011)に比べ、数値的には親になることへの積極的志向が若干低く、動植物への関心が若干高い。そして養護性得点については、項目数で除して求めた得点で今回3.00、岩治ら(2011)2.96とほとんど違いはみられなかった。なお、岩治(2005)

の331名(平均年齢20.97歳)のデータの内の170名の男子学生の得点は子ども・赤ちゃんへの関心46.84、親に対するポジティブな感情28.28、親になることへの積極的志向14.71、奉仕的な志向11.08、将来の子育てに対するネガティブな予測9.24、動植物への関心13.49であった。男子学生は、数値的に全ての養護性下位尺度で女子学生に比べ得点が低かった。将来の子育てに対するネガティブな予測もその差は少なく、女子学生よりネガティブな予測をしていないことが示されていた。今回のデータと比較しても同様のことがいえる。

(2) 養護性と対人関係の類型

1) 多対象型再分類法による類型と養護性: 多対象型再分類法による類型別に養護性尺度の6下位尺度(子ども・赤ちゃんへの関心17項目、親に対するポジティブな感情10項目、親になることへの積極的志向5項目、奉仕的な志向5

項目、将来の子育てに対するネガティブな予測4項目、動植物への関心5項目)各平均得点(SD)を算出した。また、将来の子育てに対するネガティブな予測を逆転した上で、養護性尺度の6下位尺度を合計して算出した養護性尺度得点(SD)を、表5-2に示した。

子ども・赤ちゃんへの関心 ($F(3,147) = 4.214$ $p < .01$) 親に対するポジティブな感情 ($F(3,147) = 5.795$ $p < .01$) 親になることへの積極的志向 ($F(3,147) = 3.688$ $p < .05$) 奉仕的な志向 ($F(3,147) = 5.454$ $p < .01$) および養護性尺度全体得点 ($F(3,147) = 6.759$ $p < .01$) で多対象型再分類

法による類型間で有意差がみられた。

子ども・赤ちゃんへの関心は家族型で最も得点が高く、一匹狼型が低かった。一匹狼型は家族型に比べ有意にその得点が低かった。混合型は家族型に次いで子ども・赤ちゃんへの関心尺度平均得点が高いが、SD得点も高いという特徴が見られた。親に対するポジティブな感情は混合型で最も得点が高く、次いで家族型が高い。そして一匹狼型が最も低い。一匹狼型は混合型、家族型に比べ有意にその得点が低かった。非家族型も混合型、家族型に比べて有意にその得点が低い。親になることへの積極的志向

表5-1 養護性下位尺度および養護性尺度の各平均得点

	今回のデータ n=151		岩治・井森2011 n=80	
	尺度得点	SD	尺度得点	SD
子ども・赤ちゃんへの関心 (17項目)	53.36	9.09	52.34	7.01
親に対するポジティブな感情 (10項目)	30.94	5.69	30.15	4.82
親になることへの積極的志向 (5項目)	14.96	3.81	16.29	3.41
奉仕的な志向 (5項目)	14.56	2.56	14.39	2.03
将来の子育てに対するネガティブな予測 (4項目)	9.85	2.39	10.03	2.14
動植物への関心 (5項目)	14.28	2.76	13.15	1.80
養護性 (将来の子育てに対するネガティブな予測逆)	138.26	18.25	136.28	14.87

表5-2 多対象型再分類法による類型別養護性尺度6下位尺度平均得点(SD)

	家族型 (n=44)		非家族型 (n=84)		混合型 (n=17)		一匹狼型 (n=6)	
	尺度得点	SD	尺度得点	SD	尺度得点	SD	尺度得点	SD
子ども・赤ちゃんへの関心	56.02	6.04	52.53	9.46	54.12	11.49	43.33	7.71
親に対するポジティブな感情	32.50	4.61	29.81	5.94	34.12	4.14	26.33	6.74
親になることへの積極的志向	15.11	3.69	14.98	3.57	16.12	4.44	10.33	3.61
奉仕的な志向	14.86	2.01	14.51	2.67	15.35	2.67	10.83	0.75
将来子育てに対するネガ予測	9.41	2.30	10.08	2.36	9.65	2.64	10.33	2.80
動植物への関心	14.13	2.37	14.67	2.96	14.71	2.80	12.33	2.16
養護性(子育てネガ予測逆転)	143.23	12.99	136.15	18.82	144.76	19.92	112.83	13.45

も混合型で最も得点が高く、次いで家族型、非家族型とつづき、一匹狼型が最も低い。一匹狼型は混合型、家族型、非家族型と他の全ての型に比較して有意にその得点が低かった。

奉仕的な志向も混合型で最も得点が高く、次いで家族型が高い。そして一匹狼型が最も低い。一匹狼型は混合型、家族型に比べ、また非家族型に比べても有意にその得点が低かった。養護性尺度全体においても混合型が最も得点が高く、次いで家族型が高い。そして一匹狼型が最も低い。一匹狼型は混合型、家族型に比べ、また非家族型に比べても有意にその得点が低かった。

混合型は類型の中で数値的に親に対するポジティブな感情、親になることへの積極的志向、奉仕的な志向、動植物への関心得点が最も高く、また子ども・赤ちゃんへの関心得点も家族型について高い。逆に、(逆転する前の)将来の子育てに対するネガティブな予測得点は最も低く、養護性尺度得点も数値的に最も高い。家族型は親に対するポジティブな感情、親になることへの積極的志向、奉仕的な志向が混合型に次いで高く、子ども・赤ちゃんへの関心得点は類型の中で数値的に最も高い。逆に、(逆転する前の)将来の子育てに対するネガティブな予測得点は混合型に次いで低く、養護性尺度得点も数値的に混合型に次いで高い。非家族型は全ての下位尺度平均得点において混合型と家族型を数値的に超えることはなく、全体平均に近い値であった。ただ、親に対するポジティブな感情においては、混合型と家族型に比べて有意に低かった。しかし、親になることへの積極的志向、奉仕的な志向では一匹狼型に比べて有意にその得点は高く、養護性尺度得点も一匹狼型に比べ有意に高かった。親に対してのポジティブな感情がやや低いのが特徴といえる。一匹狼型は(逆

転する前の)将来の子育てに対するネガティブな予測得点は最も高く、子ども・赤ちゃんへの関心、親に対するポジティブな感情、親になることへの積極的志向、奉仕的な志向、動植物への関心は最も低く、養護性尺度得点もどの他の類型より有意に低かった。養護性を形成するための介入を必要とする類型と考えられる。

2) 最高得点法による類型と養護性：最高得点法による類型(祖母型一名を除く)別に養護性尺度の6下位尺度(子ども・赤ちゃんへの関心17項目、親に対するポジティブな感情10項目、親になることへの積極的志向5項目、奉仕的な志向5項目、将来の子育てに対するネガティブな予測4項目、動植物への関心5項目)各平均得点(SD)を算出した。また、将来の子育てに対するネガティブな予測を逆転した上で、養護性尺度の6下位尺度を合計して算出した養護性尺度得点(SD)を、表5-3に示した。

子ども・赤ちゃんへの関心($F(5,144) = 2.758$ $p < .05$) 親に対するポジティブな感情($F(5,144) = 4.270$ $p < .01$) 親になることへの積極的志向($F(5,144) = 4.446$ $p < .01$) 奉仕的な志向($F(5,144) = 3.973$ $p < .01$) および養護性尺度全体得点($F(5,144) = 4.860$ $p < .01$)で最高得点法による対人関係の類型間で有意差がみられた。子ども・赤ちゃんへの関心は数値的には多対象型が最も高く、母親型、きょうだい型と続き、一匹狼型が最も低かった。一匹狼型と多対象型、母親型の間には有意差がみられた。親に対するポジティブな感情は子ども・赤ちゃんへの関心同様、多対象型が最も高く、母親型、きょうだい型と続き、一匹狼型が最も低かった。ただ、親に対するポジティブな感情では恋人型も数値が低い傾向がみられた。一匹狼型と多対象型、恋人型と多対象型の間には有意差がみられ

表5-3 最高得点法による類型（祖母型一名を除く）別養護性6下位尺度平均得点

	母親型 (n=27)		友達型 (n=48)		恋人型 (n=22)		きょうだい型 (n=7)		多対象型 (n=40)		一匹狼型 (n=6)	
	尺度得点	SD	尺度得点	SD	尺度得点	SD	尺度得点	SD	尺度得点	SD	尺度得点	SD
子ども・赤ちゃんへの関心	55.33	5.45	52.00	8.54	51.86	11.38	54.71	7.52	55.73	9.81	43.33	7.71
親に対するポジティブな感情	32.74	3.68	30.06	5.51	28.36	6.69	31.43	4.31	33.18	4.95	26.33	6.74
親になることへの積極的志向	14.81	3.71	14.38	3.71	15.36	3.54	12.86	4.14	16.63	3.39	10.33	3.61
奉仕的な志向	15.07	2.15	14.10	2.26	14.86	3.36	14.86	1.68	15.18	2.48	10.83	0.75
将来子育てに対するネガ予測	8.93	2.06	9.96	2.27	9.95	2.17	9.86	2.97	10.18	2.68	10.33	2.80
動植物への関心	14.15	2.80	13.94	2.97	15.27	2.76	14.29	1.70	14.50	2.65	12.33	2.16
養護性	143.19	12.71	134.52	15.79	135.77	23.38	138.29	15.34	145.03	18.09	112.83	13.45

た。親になることへの積極的志向においては多対象型が最も高いが、次に恋人型が高かった。母親型、友達型とやや低くなり、一匹狼型が最も低い。きょうだい型も数値が低い傾向がみられた。一匹狼型と多対象型、恋人型および友達型と多対象型との間に有意差が見られた。奉仕的な志向は多対象型、母親型が高く、きょうだい型・恋人型と続き、一匹狼型が最も低い。奉仕的な志向では一匹狼型と他のすべての類型（多対象型、母親型、きょうだい型、恋人型、友達型）との間に有意差がみられた。将来の子育てに対するネガティブな予測には類型間に有意差はみられなかったが数値的には一匹狼型が最も高く、母親型が最も低かった。なお、一匹狼型に次いで高かったのは多対象型であった。

養護性尺度得点は多対象型が最も高く、母親型次いできょうだい型も高かった。一番低いのは一匹狼型であり、多対象型、母親型、恋人型、友達型との間に有意差がみられた。

多対象型は数値的に養護性得点が最も高く、下位尺度である子ども・赤ちゃんへの関心、親に対するポジティブな感情、親になることへの積極的志向、奉仕的な志向、動植物への関心得

点も最も高い。ただし将来の子育てに対するネガティブな予測に関しては類型間で有意差はないが、一匹狼型に次いで高く、将来の子育てに対するネガティブな予測傾向が若干みられる。母親型は子ども・赤ちゃんへの関心、親に対するポジティブな感情が高く、将来の子育てに対するネガティブな予測は低く、養護性得点が高い。

きょうだい型は数値的に子ども・赤ちゃんへの関心、親に対するポジティブな感情、奉仕的な志向はやや高いが、親になることへの積極的志向が低いのが特徴である。

恋人型は肯定傾向では有るが、数値的には子ども・赤ちゃんへの関心、親に対するポジティブな感情が一匹狼型を除く他の類型より低い。一方で動植物への関心、親になることへの積極的志向に関しては高い。

3) 一匹狼型、低ARS得点群の養護性

関係様式と同様、誰に対しても得点が低い傾向にあるものの特徴を探るため、一匹狼型とそれ以外、および低ARS得点（48点未満）群とそれ以外の友人関係尺度下位尺度平均得点（SD）の比較を表6-1、表6-2に示した。

一匹狼型 (n=6) とそれ以外の群 (n=145) と比較したところ(表6-1)、子ども・赤ちゃんへの関心 ($t(149) = -2.822, p < .01$) 親に対するポジティブな感情 ($t(149) = -2.046, p < .05$) 親になることへの積極的志向 ($t(149) = -3.124, p < .01$) 奉仕的な志向 ($t(149) = -3.805, p < .01$) に有意差がみられ、一匹狼型はそれ以外に比べ、有意に子ども・赤ちゃんへの関心、親に対するポジティブな感情、親になることへの積極的志向、奉仕的な志向得点が低かった。

低ARS得点群 (n=26) とそれ以外 (n=125)

を比較したところ(表6-2)、親に対するポジティブな感情 ($t(149) = -2.889, p < .05$) 親になることへの積極的志向 ($t(149) = -4.854, p < .01$) 奉仕的な志向 ($t(149) = -3.461, p < .01$) に有意差がみられ、低ARS得点群はそれ以外に比べ、有意に親に対するポジティブな感情、親になることへの積極的志向、奉仕的な志向得点が低かった。また、子ども・赤ちゃんへの関心 ($t(149) = -1.975, p < .10$) には有意傾向がみられ、低ARS得点群はそれ以外に比べ子ども・赤ちゃんへの関心が低い傾向が示された。

表6-1 一匹狼型とそれ以外の養護性尺度下位尺度平均得点 (SD) の比較

	一匹狼型 (n=6)		それ以外 (n=145)	
	尺度得点	SD	尺度得点	SD
子ども・赤ちゃんへの関心	43.33	7.71	53.78	8.92
親に対するポジティブな感情	26.33	6.74	31.13	5.59
親になることへの積極的志向	10.33	3.61	15.15	3.70
奉仕的な志向	10.83	.75	14.72	2.49
将来の子育てに対するネガティブな予測	10.33	2.80	9.83	2.38
動植物への関心	12.33	2.16	14.36	2.76
養護性	112.83	13.45	139.31	17.68

表6-2 低ARS得点群とそれ以外の友人関係尺度下位尺度平均得点 (SD) の比較

	低ARS得点群 (n=26)		それ以外 (n=125)	
	尺度得点	SD	尺度得点	SD
子ども・赤ちゃんへの関心	50.19	9.43	54.02	8.91
親に対するポジティブな感情	28.07	5.89	31.53	5.48
親になることへの積極的志向	11.88	4.08	15.60	3.43
奉仕的な志向	13.04	2.24	14.88	2.51
将来の子育てに対するネガティブな予測	9.15	2.34	9.99	2.38
動植物への関心	13.77	2.93	14.38	2.73
養護性	127.81	16.29	140.43	17.94

まとめと今後の課題

1. 女子大学生の人間関係の枠組みと強さ「親密性」

大多数の者が複数の重要な他者をもっていることが確かめられた。ただし、誰とも強い関係をもっていないもの（ARSが極端に低いもの）が4%見られた。高橋の研究によるとこれはどの年代でも3~10%程度出現している。現代の女子大学生の人間関係がとくに希薄化しているという証拠はみられなかった。ただし、井上・高橋(1999)の比べ、恋人型は少なく同性の友人型、母親型が増えている。また総じて家族型が増えているということは対人関係の形成に問題が生じてきているということなのか、あるいは大学生の居住状態の変化が影響しているのか今後検討していく必要があると思われる。また多対象型、混合型(母親・友人)が増加していることも、検討課題である。

2. 女子大学生の対人関係様式

岡田(1995)に比べ、ふれあい回避は減少、群れが若干増加していた。これは、今回の対象が女子大生ということで、性差が影響しているとも考えられるが、身近な人間関係を求め「友だちがいないようにみられるのは耐えられない」傾向が強くなっていることを示唆しているとも思われる。今後男子大学生を含めた調査を行い検討することが必要と思われる。

3. 人間関係の枠組み・強さと対人関係様式

誰とも強い関係をもっていないもの（一匹狼を含めARSが低いもの）は気遣いをせず、ふれあい回避の傾向があり、群れない。混合型はそれとは全く逆でふれあいを回避する傾向はなく、気遣いをし、群れる。非家族型はふれあい回避の傾向はなく、気遣いをするが、群れない

という特徴がみられた。なかでも友達型は気遣うが、群れる傾向はみられない。恋人型はふれあい回避傾向が最も少なく、群れる傾向はみられないという特徴が見られた。非家族型は人間関係に過度に敏感になることなく、安定した関係を築いていると思われる。誰とも強い関係をもっていないものには対人関係断絶傾向があり、問題を持つ可能性が考えられる。

4. 養護性と人間関係の枠組み・強さ

混合型、家族型は養護性が高い傾向にあった。非家族型は親に対するポジティブな感情がやや低く、恋人型では親になることへの積極的志向はやや高い傾向にあった。誰とも強い関係をもっていないもの（一匹狼を含めARSが低いもの）は養護性の6下位尺度のうち将来の子育てに関するネガティブな予測と動植物への関心を除く、子ども・赤ちゃんへの関心、親に対するポジティブな感情、親になることへの積極的志向、奉仕的な志向が低く、養護性形成に問題を持つことが示唆された。

文 献

- 1) 井森澄江・岩治まとか・清水宏子・大井京子 2004 青年女子の養護性の発達(1) 日本教育心理学会第46回総会論文集 p376
- 2) 井森澄江・大井京子 2008 女子青年における“乳幼児期から現在までの親との関係”と“養護性”—回顧法による生育史の分析をもちいて—東京家政大学附属臨床相談センター紀要第八集
- 3) 井森澄江・岩治まとか 2010 女子大学生における親準備性の発達(1)—入学時のソーシャルスキルについて— 東京家政大学研究紀要第50集 p143~149
- 4) 井森澄江・岩治まとか 2011 女子大学生における親準備性の発達(3)—2年進学時のソーシャルスキルについて— 東京家政大学研究紀要第51集 p113~120
- 5) 岩治まとか・井森澄江 2010 女子大学生における親準備性の発達(2)—入学時の養護性について— 東京家政大学研究紀要第50集 p151~158
- 6) 岩治まとか・井森澄江 2011 女子大学生における親準備性の発達(4)—2年進学時の養護性について—東京家政大学研究紀要第51集 p121~128
- 7) 相川充・藤田正美 2005 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成 東京学芸大学紀要1部門56 pp87-93
- 8) 岩治まとか・井森澄江 2012 大学後期の親準備性と大学生活(2)—外部施設への実習を通しての変化—日本パーソナリティ心理学会第21回大会発表論文集 p110
- 9) 井森澄江・岩治まとか 2012 大学後期の親準備性と大学生活(1)—外部施設への実習を通しての変化—日本パーソナリティ心理学会第21回大会発表論文集 p109
- 10) 辻大介 1996 若者におけるコミュニケーション様式変化—若者語のポストモダンティ—東京大学社会情報研究所紀要51号 pp42-61
- 11) 辻大介 2009 友だちがいないと見られることの不安 特集—一人恐怖症 少年育成, 634号 pp26-31
- 12) 岩治まとか 2005 青年期における養護性の検討 東京家政大学大学院文学研究科修士論文
- 13) 伏見友里・武井澄江 2013 女性のライフイベントと発達に関する横断的研究(1)—レジリエンス尺度の構成—日本発達心理学会第24回大会発表論文集 p428
- 14) 白井利明 1994 時間的展望体験尺度の作成に関する研究」心理学研究65 pp54-60
- 15) 岡田努 1995 現代大学生の友人関係と自己像に関する考察 教育心理学研究43 pp354-363
- 16) Takahashi, K. 1990 Affective relationships and lifelong development In P.B.Baltes, D.L.Featherman & R.M.Lerner (Eds.) Life-span development and Behavior, Vol.10 Hillsdale, NJ: Erlbaum. pp1-27
- 17) Takahashi, K., & Sakamoto, A. 2000 Assessing social relationships in adolescents and adults: Constructing and validating the affective relationships scale. International Journal of Behavioral Development, 24, pp451-463
- 18) 高橋恵子 2002 生涯にわたる人間関係の測定—ARSとPARTについて 聖心女子大学論叢98 pp101-122

- 19) 高橋恵子 2007 人間関係の生涯発達理論
—愛情の関係モデル マイケル・ルイス、
高橋恵子(編)愛着からソーシャル・ネット
ワークへ 新曜社 pp73-104
- 20) 高橋恵子 2010 人間関係の心理学 愛情
のネットワークの生涯発達 東京大学出版
会
- 21) 井上まり子・高橋恵子 女子大学生の対人
関係の種類と大学生活での適応 日本心理
学会第63回大会発表論文集 p91

Abstract

The purpose of the present study is to investigate the personal framework of social relationships shared by contemporary adolescent girls and to relate that framework to interpersonal relationships (friendship) and readiness for parenthood (nurturance). We surveyed 151 students from a women's university through a questionnaire covering a face sheet, an Affective Relationships Scale (ARS), a friendship scale, a nurturance scale, and so forth. From the analysis of the ARS, a large majority of students were shown to have multiple important relationships with people who reside in a hierarchy comprising friends of the same sex, the mother, or a romantic partner. However, there were a few students, called the "lone wolf type," who exhibited an extremely low ARS score and had no significant others. The analysis of the friendship scale suggests that lone wolf type students have a tendency to avoiding deep relationships with others. Moreover, lone wolf type students scored significantly lower than the rest on the nurturance scale, and they are in need of an intervention to instill nurturance. The types introduced in the personal framework of social relationships are found to be related to the differences in interpersonal relationships, the emotional attitude toward parents, and intention to achieve parenthood, from which nurturance forms.

Key words: personal framework of social relationships, readiness for parenthood,
contemporary students from a women's university